

瑠璃も玻璃も

兵庫県 神戸市立御影北小学校四年 鈴鹿 蒼

「昨日おばあちゃんと一緒にだった？駅前で手をふったんだよ。」

学校で友だちにそう聞かれて、私は首をかしげた。県外に住む祖母はここ最近神戸にはきていない。そしてハッと気がついた。友人が母を祖母だと思っていることに。

私は母が四十二才の時の子どもだ。

周りの友達のお母さんが三十代前半の中、母はもう五十才を超えている。昔から、

「お母さんって何才？」と聞くと、

「チンゲンサイかな。」

と言ってまともに教えてくれたことがなかったが、それは周りの若いお母さんへの引け目があったのかもしれない。

確かに母の頭はまるで雪をいただいた富士山のように真っ白だ。私には物心つく頃から当たり前の姿だ

ったが、その白髪頭が友だちにはおばあちゃんに見えたのだろう。

友達のお母さんはふわふわの髪の毛にキラキラしたネイル、いい匂いの香水、風になびくスカートとお姫様のようなとても素敵だ。

一方、私の母は医師という職業柄もあり、いつもマスクと眼鏡で、緊急の呼び出しに備えて地味なズボンでスニーカーだ。つめも短く、ほんのりと消毒薬のおいがする。確かに、はなやかさには欠ける。せめて髪が黒ければ、もう少し若く見えたかもしれないが、母は気にせずほったらかしだ。

白髪は老化、睡眠不足やストレス、栄養不足などが影響して増える。昔の写真を見ると、母の白髪が急激に増えたのは、私たち兄妹を産んだあからのようであった。

母は、不妊治りよを何年もして、苦勞の末、ようやく私たちを授かった。私の時には高齢出産でも

私とその玻璃をキラキラと輝かせる光でありたい。

あり、妊娠合併症など心身共にこたえたそうだし、私も私も兄も夜泣きが二才くらいまで続き、まともな睡眠は取れなかったらしい。そんな毎日に母の髪はどんどん白くなり、今では銀髪のようになった。また、私たち兄妹は皮膚が弱かったので、かぶれないようにと、髪を染めたり、化粧をするのは、何かの式や参観日といった、人前に行事のある時だけだった。もう今ならかぶれを気にすることはな

いと思うのだが、その習慣は今でも続いている。

白髪だらけでも、老けていても、私にとって母は唯一無二の存在だ。仕事帰りに下校中の私を見つけ、笑顔で両手をふる母。白衣を着ると、するどく指示をとばし、患者の命を救う母。その姿は私の誇りである。

母の白髪はただの老化ではない。

それは今まで母が私たちに注いできてくれた愛情が、医師として仕事にかけてきた情熱が、この一本一本の中に蓄積し、結晶化してできた、珠玉の玻璃なのだ。

「ああ、それ、私のお母さんなんよ！」

だから私は友達に胸を張って答える。

ぱっと見ればただの白髪かもしれないが、「瑠璃も玻璃も照らせば光る」のことわざにあるように、

